容器から水をうつすこと

津守　真

子どもがひとつの行為にひたすら没入しているとき、子どもは無意味にそれをしているのではないと思う。養護学校の子どもはことばで表現しないので大人に分かりにくいのだが、だまって水をいじっているときにも、いろいろの感覚や思いがあるようだ。ある機会に、同様の行為を別の子どもがしており、しかもそれが強く子どもの心をひきつけているのを発見すると、その行為は、子どもが人間となってゆくのに共通に大切なものを含んでいるのではないかと考えさせられる。普通にはただのいたずらや偶然と考えられて、そのことの価値が見逃されやすいが、子どもによっては長い期間かけてゆっくりとそれをするので、だれにも大切な部分を浮き彫りにみせてくれるのである。

三歳の子どもが心からたのしむ遊び

昨年の暮に、私はもうじき三歳になるS子の家を訪ねた。私とはしばしば遊ぶ間柄なの

に、その子は風邪をひいて元気がなく、母親の傍を離れなかった。私は母親とおしゃべりしながら、なかばその子の相手をしてしばらくを過ごした。クリスマスによそから頂いたミニハウスに、人形を入れたり出したり、御馳走をつくったり、三歳の子どもは流暢にしゃべりながらあそんだ。しばらくしてテーブルの上でおやつになったが、S子は私にひとつおいて隣の椅子に坐るようにと指示する。母親がコップにお茶をつぐと、アツイからもうひとつコップをくれと言って、大きさの違う柄つきの容器をもらった。はじめのうちはアツイからさますという理由で、お茶をもうひとつの容器に移しかえ、またもとのコップにもどすことを何回かくり返した。そのうちに分かってきたことは、アツイからというのは表向きの理由で、容器から別の容器へと水を移しかえるのが面白いことだった。そうなると子どもは口もきかずに熱中する。はじめのうちはコボレタと言ってふいていたが、だんだんに机の一角は水びたしになった。この遊びに比べたら、ミニハウスでお人形に御馳走を作ったりねかしたりという私との間のあそびは、子どもの方が私の遊びでのパターンにつき合ってくれているという感じで、これほどに自分を打ちこんでやっているとは思えない。十五分ほど熱心にやったあと、S子は私との間でゆったりと過ごすようになった。もう隣に坐ってもおこらない。風邪をひいた冬の午後のひとときを、この子は満ちたりて過ごしたと思う。

養護学校の子どもの水遊び

冬休みが終わって三学期最初の日に、養護学校の門から入ってくるところに私と出会ったN夫は私の手をひいて部屋に入ると、すぐに流しにきてプラスチックの大びんに水道の蛇口から水をいれはじめた。それから小さいびんに丁度一杯になるように水を移し、足もとにあったミニハウスの一センチ立方ほどの小さなバスタブと台所流しにその水をこぼれないように適量いれた。どの位で丁度よいかを心得ている。N夫はまた流しにもどると、小さいびんから大きいびんへと何度も水を入れ、一杯になると違う容器へと水を移しかえる。流しにはいろいろの形や大きさのびんがいくつもおいてあって、次々に水を出したりいれたり、えのぐの筆をその中にいれて色水をつくったり、余念がない。

冬休み中、家で台所のなべや容器を全部出して水を移しかえることをやっていて、台所中水びたしにしていたと、傍で一緒にいた母親が話してくれた。一年前の冬には下をむいてひとりで指先をいじっていたのを考えると、この子の心が開けて活動がひろがってきたことが嬉しいと言った。この子は小さい容器に何杯で大きい容器が一杯になるということが、ことばで数字を言うわけではないけれども分かっているんですと母親は言う。私もN夫の動作のひとつひとつを付き合っていると、この子は容器から容器へと水をいれかえながら分量を考えているように思う。ピアジェが言うように、形や大きさの異なるびんに同量の水がどのように入るかを自分でためしていると言ってもよい。容器から水を移しかえてあたりを水びたしにしてしまう、大人を困らせる遊びの中に、子ども自身の実験が含まれている。N夫はこの日、手の中に小さな時計と定規を握ってきた。数字を刻んだ時計を

手にしながら、この容器に何杯がこちらの容器に何杯というような数量関係をこの子は途中で考えながら来たのかもしれない。そう考えると、付き合っている私も、いろいろの形や大きさの容器を出すことに興味が出てくる。

そのせいかどうか分からないが、N夫は急に水あそびをやめた。このチャンスにこんなことをやらせようという気が私の心に生じると、それだけで圧力を感じる子どもがいる。そしてN夫は私の手をひいて庭に出た。滑り台を下から上にのぼろうとする。私は滑り台の上にいってN夫を呼ぶと、私の顔を見上げて笑ったN夫は、手にもっていた時計と定規を手放して、実習生にお尻を押してもらい滑り台の上までのぼってきた。声を立てて何度もそれをくり返した。

砂場と容器の遊び

正月になって風邪もなおったS子が私の家にきたとき、玄関を入るとすぐに私にとびついた。S子は私と何かをして遊ぼうと思っている。この前、私との間で、容器から水をうつす遊びをゆっくりとしたからだと思う。しばらくして近くの公園にいったとき、砂場でS子はシャベルに砂をすくって容器にいれた。容器をさかさにして型をぬくと砂が崩れた。S子は「モット　カタメナクチャ」と言って容器に砂を多めにいれて叩く。水と違って砂は密度と分量とが関係することを知っている。それからバケツに砂を一杯にいれ、シャベルで少し砂をとりのけ、「モテルカナ」と言う。自分が持ち上げる力と、容器にいれ

る砂の分量との関係を、この子は把握している。食卓の上で容器から容器へと水をうつしかえること、砂を容器にいれて型をぬくこと、こうしたことをくり返しながら、子どもは容器と量、物質の違いなどを身体感覚の水準で試みている。水や砂で遊ぶ子どもとつき合っていると、無言の行為の中にさまざまな感覚や思いがこめられているのがわかる。容器と量の関係はその中のひとつである。

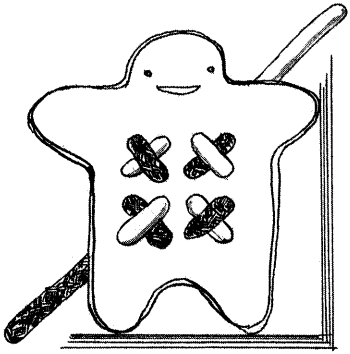
N夫は次の日に、庭で、バケツや容器に水を運んで、砂場に掘ってあった穴の中にいれることをくり返した。容器の水が砂のくぼみの中に吸いとられてなくなるまでじっと見つめては水をくみにいった。大地という容器の中には何杯でも水がしみこんでゆく。他の子どもたちが数人、砂場で遊ぶ中で、N夫はひとりでそれをしつづけた。バケツに運ぶ水も、自分が持てるほどの分量で水道をとめる。この子どもはもはや容器から容器へと水をうつす行為の中に閉じこめられてはいない。他の子どもたちの容器を使ったり、開かれた場で、容器と大地との関係をたしかめている。

身体行為による表現

私は、三歳のS子が自分らしく活動しはじめたときの行為として、容器から容器へと水をうつすことに着目したのであるが、そのほかにもいくつかこの多弁な子どもが心からたのしむ遊びがあることに気付いている。人を集めること、スコッティの箱から紙を次々に

全部取り出すこと、おもちゃ箱をひっくりかえすことなど、いずれも身体行為による表現である。

いつものようにおしゃべりをしながらままごとなどをした後、S子は正月に私の家に訪ねてきた大人たちをひとりずつ呼んできて手をつながせた。そのうちに、「ミンナ　キテ」と言って全部の人を集めた。一緒に何かをしてあそぶというよりも、みんなを集めること自体が面白いようだ。これと同じことを養護学校で私は何度もみてきた。いずれの場合も、自分のことだけで思いが一杯になっている状態から子どもの心が解放され、外に関心が向くようになったときのことである。H夫がひたすら漢字を壁に書かせていた時期を通りすぎたとき、学校中の先生たちをひとりずつ呼んできてブランコに集めたことがあった。また昨年の秋、T夫がカギに執着しなくなったとき、実習生や先生たちを集めて並ば



せた。

三歳のS子は、外の世界に眼が向きはじめたようだ。この子は四月から幼稚園の三歳児クラスにゆく。

三歳の子どもは、ことばではまとまりのあることを言っているようでも、心からたのしむ遊びは、ことば以前のさまざまな身体感覚の水準で子どもなりにためし、考える活動であろう。S子は私の家に遊びにくると、まずおもちゃ箱をひっくりかえし、それによって自分の空間をつくってから遊びはじめる。養護学校で、何人もの子どもについて同じことを私は見てきた。そこをぬきにしたら子どもの活動はよそゆきになってしまう。

養護学校の子どもたちは、一見単純な行為を、長時間、長い期間にわたってくり返す。この子どもたちはことばで説明しないが、身体感覚の水準で、さまざまに感じ、また考えている。ことばを話す子どもたちにとっても、身体行為によって体験し、考え、表現することがまず基本にある。

（愛育養護学校）